

宋末元初の文學言語

——晚唐體の行方——

12世紀の末から13世紀の初めにかけて、范成大（一一二六～九三）、楊萬里（一一二四～二〇六）、陸游（一一二五～一二〇）という中興の士大夫詩人が相次いで世を去った。この後、宋朝滅亡の時（一二七九）まで詩壇を賑わしたのは、永嘉の四靈や江湖派詩人と呼ばれる、一群の寒士もしくは布衣の詩人たちである。彼ら一人一人が中國詩歌史に刻んだ足跡は、むろん范・楊・陸三大家とは比べるべくもなく微小なものであった。しかし、後の時代を視野に納めるとき、彼らの總體としての存在意義は俄然高漲する。つとに、吉川幸次郎氏が彼らを「元明、清の時期を通じ、文學が主として民間人をしてない手とするさいしよである」（『宋詩概説』第六章第一節「民間の詩人たち」）と指摘した通りである。換言するならば、范・楊・陸三家を最後として、中國傳統文學の中心的擔い手が士大夫（士）から民間人（庶）へと移行してゆく、その轉換點として彼らを位置づけることができる、という。

吉川氏のこの指摘はまことに卓見といつてよいが、その後、半世紀の間に、この一群の詩人に着目した日本の研究は、管見の範圍ではまったく現れていない。中國においては、九十年代以降、張宏生氏の『江湖詩派研究』を始めとして、二三の專著が公刊されたが、それでも學

界の關心を集めているという状況にはほど遠い。そのもつとも大きな原因はおそらく、彼らの存在を唐宋ないしは宋代詩史という枠組みのなかに押し込めてとらえようとする立場が一般的だからであろう。そのばあい、宋朝の滅亡前夜に活躍した彼らに對しては、「詩史の衰退」というマイナスのフィルターがごく自然にかけられることになる。しかし、彼らをひとたび近世詩史というより大きな枠組みのなかで位置づけ直すと、それとはまったく異なる意味が立ち現れる。吉川氏の指摘が正しければ、元明清とつづく中國近世の詩史は、彼らの活躍によって切り開かれたととなり、したがってその意義が小さかろうはずはない。

このような觀點に立ち、筆者はここ數年、宋末の江湖詩人の存在に關心を寄せ、彼らを「中國近世詩」の萌芽と見なす立場から、吉川説の再檢證を試みている。吉川氏の指摘は、概説という書物の性格に影響されてか、變化の推移や現象の要因については、簡略な敘述に止まっております。なお檢證・檢討すべき課題が多く含まれる、と考えるからである。かくて、すでに別稿^③において、「近世」という時代區分の本質を吟味し抽出したうえで、士大夫以外の新たな詩人階層の出現を有

内山精也

宋三百年のなかに探り、加えて宋代出版の北宋初から南宋末までの變遷の跡を辿り、然るのちに彼らの存在を、詩における本格的な近世現象の濫觴である、と改めて結論づけた。本稿では、元の前半期までを視野に納めながら、彼らがどのような時代のうねりのなかに身を置き詩作をしていたのかという問題や、彼らの詩作が元の時代にどのような受け繼がれていったのか等の問題について考えてみたい。

ただし、宋末元初は、ひとり文學のみならず言語全般においても、きわめて大きな轉換を迎えた時代でもある。したがって、そのような大状況をも考慮に入れて、個別の問題を考察してゆく必要がある。そこで、本稿では、幾つかの視點を用意して、その大状況を描き出すことからすべてを始めることとしたい。すなわち、第一に「文言—官話—方言」という、言語的社會階層を措定し、それが中世から近世への移行によつてどのように變化したのかという視點を確保し、第二にその變化を促した要因として、科擧制度の改變と民間出版資本の成熟という二點に着目し、變化のメカニズムを明確にする。その上で、宋末元初における文學言語の状況を「文言の通俗化」と「白話(官話)の高雅化」という觀點から照射してみたい。そのようなマクロの視點からの素描をもとに、最後に南宋末江湖派の詩のスタイルである「晚唐體」をめぐる問題について考察することとする。

一、言語の階級性と科擧

まず、用語の概念規定を行つておきたい。本稿では、「近世」という時代の特徴をもつともよく象徴するキーワードとして、「通俗化」「世俗化」「大衆化」等のことばを措定する。いわゆる「近世」(Early Modern) とは、中世 (Middle Ages) と近代 (Modern) の間にある移

行期であり、國や地域によつて「中世」の内實が異なるので、それに連續する近世の内實も當然のことながら各國各地域の間で均一ではない。しかし、ゴールとしての「近代」の政治社會體制が國民國家 (Nation-state) という點において一致するので、その特質にも確かな共通項ないしは方向性を見出しうる。すなわち、大衆が權力の中心に躍り出る時代が近代の最大の特質であるとするならば、近世はそういう時代を準備した前段階の時代と措定されるはずであり、したがつて「通俗化」「世俗化」「大衆化」こそが重要な指標となるわけである。また本稿では、内藤湖南・宮崎市定の説、すなわち、北宋以後、清末までの九世紀半を近世社會とする説に従う。ただし、行論の都合上、さらに前期と後期とに區分するばあいもある。そのばあいは、宋と元の約四世紀を「近世前期」、明と清五世紀半を「近世後期」と稱する。この線引きは、主として科擧制度の異同を根據とする(後述)。

*

アメリカの政治學者、ベネディクト・アンダーソンは、ヨーロッパを主たる對象として國民國家が成立してゆく過程を分析し、併せて國語の成立過程にも言及している。彼は、中世において半固定的であつた言語と社會階層の關係性を、出版資本が切り崩してゆき、それが國語創成の下地となつたことを指摘している。その前提として、「神聖なる文章語」(ラテン語)と「口語俗語」(各地の方言)という二種類の言語を使いこなせる人々が知識階層、すなわち特權階級を構成し、後者一種しか用いない階層が大衆であつた、という概括を行い、二重の言語使用者である上層階級と文字をもたない口語俗語のみの單一言語使用者である大衆という對比を鮮明に描き出している。

この圖式は、中國の前近代にも適用可能である。ただし、中國のば

あい、とりわけ近世以前においては、大衆、すなわち「庶」が口語俗語のみの単一言語使用者である點は變わらないものの、爲政者階層である「士」は、第三の言語を使用する點においてヨーロッパとは異なっている。すなわち、「神聖なる文章語」文言と「口語俗語」出身地の方言」のほかに、彼らは「爲政者間の共通口語」官話」を使用した。唐以前の官話資料はきわめて少ないが、「文言」の文體的特質を考慮に入れば、官話もしくはそれに類する言語現象が、唐以前より存在したであろうことは、論理的に考えて疑いようもない。なぜならば「文言」は、視覚重視の表意文字という漢字の特性を最大限凝縮した書記言語であり、高度に視覚に依存する文體だからである。それゆえ、一統の世で中央集權的な官僚統治を行おうとすれば、官人相互の音聲的コミュニケーションを保證する共通口語「官話」が必要不可欠になったはずである。

官話は、皇帝以下文武百官が集う首都の方言をベースとして構成されたと考えられる。よつて、たとえ「庶」であつても、首都圏に生まれ育つた者ならば、行政に獨特な用語や表現を別とすれば、聽覺的理解は十分に可能であつただろう。しかし、文言は識字能力のみならず、古典的素養があつてはじめて理解可能となる傳統言語様式であるから、近世以前にあつては、出身地域の如何を問わず、人口の壓倒的多數を占める「庶」にとつて生涯無縁の文體であつた、と推測される。翻つていえば、文言とは、「士」としての地位を、言語の領域において表象するものであり、「庶」と區別されるところの「士」を成り立たせる文化的な必要條件であつた、ということができる（十分條件は「儒學の素養と實踐、とりわけ「禮」の實踐能力を備えることが要件となつたであろう）。

「士」が文言を始めとする多重言語の使用者であり、「庶」が方言のみの単一言語使用者である、という半固定的な關係性は、科擧の本格導入によつて、徐々に搖らぎ始める。それは、唐の後半期から兆し始めるが、——「士」の供給システムが科擧に一本化され、門閥貴族が消滅した——北宋以降、より一層顯著に現れ出てくる。

北宋以降の朝廷は、原則として家柄の如何を問わず、科擧によつて廣く人材を登用し彼らを「士」とした。そして、「士」には一代限りの特權しか與えなかつた。したがつて、宋代の士族は、子弟が科擧及第を果たせないと、「庶」に落ちる危險性を常に抱えていたわけである。それゆえ、——行政の中樞が門閥貴族によつて獨占され、士族が固定的であつた——中世の時代に比べ、近世は「士」と「庶」の境界が、はるかに曖昧になつた、といつてよい。科擧は「士」と「庶」の間の流動性を一定程度保證した制度といふことができる。

より重要なことは、科擧が落第者を定期的に量産する制度でもあつた、という事實である。具體的なデータを示そう。北宋末期、宣和六年（一一二四）に實施された禮部省試には、郷試を突破した一萬五千名が中央に集められ試験に臨んだが、最終的に「進士及第」の榮譽を獲得できたのは八百五名に過ぎなかつた。實に九割五分に相當する一萬四千名以上が篩にかけられている。省試の前段階、郷試に關わるデータは残つていないが、受験者總數はおそらく十萬人を下ることはなからう。この例に基づくならば、三歳一擧の科擧によつて、十萬人規模の落第者が生まれ、「士」になれなかつた彼らは、結果として「庶」として民間に沈澱することになつたのである。

運悪く落第したとはいへ、學子ともなれば、應擧の直前まで文言の學習に餘念はなかつたに相違なく、その運用能力も及第者に比べて

著しく遜色があつたわけではなからう。ということとは、科擧が實施されつづけてゆくと、「庶」のなかに、文言を解し、それを驅使することのできる人々が、三年ごとに十萬人規模で増加してゆくことを意味する。科擧をめぐるこのような構造が、文言（ならびに官話）を民間に浸透させてゆく力となつたことは想像に難くない。このように、科擧は、「士」と「庶」という二つの階層の人的流動性を促すと同時に、「士」の言語文化を「庶」に移植する装置としても機能したと見なされる。

* *

宋元明清（近世）に共通するのは科擧社會である、という點である。科擧という制度によつて、士と庶の間に往來するエレベータが設置された。もちろん、全人口に占める割合はけつして大きなものではなかつただろうが、それでも階級間の流動性が制度的に保證されたことは、決して小さな變化とはいえない。この點は、政治權力の世俗化を明瞭に表現している。また、かつて士の文化的表象として存在した文言が、明らかに士の構成要員ではない多くの民間人によつて使用され始めたことも、——落第者量産のシステムでもある——科擧が、きわめて明瞭な形でわれわれに示している。これも、「神聖なる文章語」（文言）が通俗化してゆく一つの形を表現している。

ところで、同じく科擧の制度であつても、宋元と明清の間には無視できぬ大きな差違がある。宋元において、擧子は、郷試、省試のどの段階で落第しても、再度の挑戦をする際は、再び郷試から始めなければならなかつた。それに對し、明清においては、學校制度が科擧制度のなかに組み込まれ、科擧の受験資格を得るためには、まず各州（府）縣の學校に入學することが前提條件とされ、學校に入學すると、均しく「生員」という終身的身分を得ることができた。さらに、郷試に及

第すると、「擧人」という終身的身分を得ることもできた。「擧人」の身分を一度得れば、再度科擧に挑戦するばあいには、郷試を受験する必要はなく、會試から再挑戦することができた。

すなわち、明清においては、擧子に對する一定の身分保障が圖られ、士と庶の間に「生員」と「擧人」という新たな社會身分が誕生したのである。當時の社會認識からすれば、この兩者、とりわけ「擧人」は、廣義の「士」と見なされたであろうが、むろん國政に與る權利を無條件に付與されたわけではないから、嚴密な意味での「士」ではない。したがつて、この身分保障によつて、「士」と「庶」の間の中階層が法制的に誕生したことになる。そして、「生員」はむろんのこと、「擧人」も、それぞれの本貫地に居住することが義務づけられ、それが地方に郷紳階層を生む素地となつたことを、先行研究が指摘している。ちなみに、明代後期以降、「生員」の數は増加して五十萬を前後し、清末までほぼ同數を維持したようである。その「生員」になるためには、いわゆる童試の三段階（縣試、府試、院試）を通過しなければならなかつたから、「生員」の下にも、おそらく優に百萬を超える豫備軍「童生」が控えていたと推測される。

以上のように、宋元の科擧制度は、民間に文言を驅使できる人口を増加させ、明清のそれは、さらに「士」でもなくまた「庶」でもない中間層を生み出し、その中間層が地方に影響を及ぼす仕組みを作つた。その結果、文言教育の種も全國津々浦々に播かれ、「庶」における文言の接點も近世前期から後期に移行するにしたがつて、ますます増加した、といつてよいであろう。本稿は宋末元初を主たる對象とするので、以後、近世後期の狀況には言及しないが、この中間層が近世後期の文學創作に及ぼした影響は、文言・白話の別を問わず、きわめて多

大であったと豫想される。

二、出版業の隆盛と文言の通俗化

文言の通俗化というとき、われわれは眞つ先に文言という文體に俗語的要素が加えられてゆく姿を想像するかもしれない。もちろん、そのような現象が存在しなかつたわけではない。たとえば、詩文に白話語彙が用いられる現象などは、その一例といつてもよい。しかし、結論的にいえば、文體そのものの通俗化は、全體から見れば、きわめて微小な範圍に止まつた、と考えるべきであろう。文言という文體は、もつぱら起源や成立が古いという理由だけから千年二千年繼承されたわけではない。漢字の表意性を最大限に活用するという書記言語としての合理性を具備しているうえ、それが古の聖人が用いた文體であるという權威性を帯び、さらには上層階級「士」の文化的表象として機能しつづけてきた、という歴史的正統性をも内包する文體であつた。それゆえ、「士」に屬さない多くの人士がそれを使用し始める近世の世にあつても、文言が傳統ならびに權威の象徴として言語的社會階層の頂點に君臨しつづけるためには、むしろ大きく變化しないことがすべてに優先される前提条件となつたはずである。目に見える外形的な變化は歓迎されるどころか、かえつて忌み嫌われたに相違ない。ここには、近現代における進化論もしくは進歩史觀と完全に正反對の力學が作用している。

よつて、文言の通俗化は、白話のように言語現象として明瞭な姿形をして現れ出るのではなく、より隱微な形態をとり、水面下で徐々に進行してゆく。一言でいうならば、それは使用人口の擴大という形をとつて現象する。前述のとおり、その擴大を制度的に保證したのが、

科擧ならびに擧子を育成する各種教育單位であつた。そして、それを側面から強力に支援し推進したのが、以下に述べる印刷出版事業である。

中國における印刷は、唐より始まるが、それが全國規模で事業化されるのは、北宋に入つてからである。周知のとおり、清代後期までの印刷は、ヨーロッパとは異なり、活版ではなく整版（雕版）印刷が主となるが、唐までの（寫本十卷子本）という書物形態が、（版本十册子本）に變化したことは、中國史上第二のメディア革命といつてよい（二度目は三國時代前後の、木・竹簡から（紙十毛筆）への變化）。したがつて、整版（雕版）印刷こそは、中國の近世をもつともよく表象する媒體ということにならう。

現存の資料によつて判斷する限り、北宋の約百五十年間は、印刷文化が士大夫の間に浸透し、彼らの版本への依存度が高まつた段階といつてよい。最初の百年間は主として文言典籍の刊本化が進められ、その結果、士大夫が古典的素養を身につける際に依據する書物が、寫本から版本へと漸次移行していった。そして、版本の流通が彼らの個人的な藏書量を向上させるのに大いに寄與した。北宋では官刻本が出版界をリードしてゆくが、その一方で民間の書肆も徐々に成長し、11世紀後半になると、一定の社會的影響力をもつまでに至る。元豐二年（一〇七九）に勃發した筆禍事件、「東坡烏臺詩案」¹¹において、民間で刊刻された蘇軾の詩集が證據物件として提出され、審議を左右した事實が、この點を傍證する。しかも、この事件は同時に、當時の民間出版業が同時代文學をすでに印刷の對象範圍に納めたことをも示している。

南宋に入ると、浙江杭州・福建建陽・江西廬陵等々の書坊・書肆を

中心として民間の出版業がますます勢いを増し、出版件数や印刷部数の多さにおいて官刻本を凌駕し始める。とくに12世紀の後半以降、多様な形態の注釋本が民間で多数刊行され始めた。また、各地の書院が用いる古文教本の類も、この頃から編纂刊行され始める。北宋の頃にも、擧子の需めに應じた書物の編纂刊行がなされていたことは、當時の記録によつて斷片的に知ることができ、南宋に入るとその種の書物は枚擧に暇がないほどである。しかも、歴代諸家の説のなから取捨選擇を加えた集注本や、きめ細やかな編集や嚴密な校正を賣り物にした版本も現れる。南宋中期以後の出版事情については、多くの書が採り上げるところであるし、すでに別稿においてやや詳しく論じたので、ここでは繰り返さない。ただ、ここで一點だけ強調すると、13世紀の後半、南宋末期以降、時代が下るにつれ、士大夫や擧子ばかりを對象としたのではない書物が、明らかに増加してゆく傾向を認めることができる。たとえば、都市住民の百科知識をまとめた日用類書、陳元靚『事林廣記』や、『詩學集成』とか「詩學大成」等の書名をもつ初學者向けの作詩用語集、『三體詩』や『分門纂類唐宋時賢千家詩選』、『唐宋千家聯珠詩格』等、近體の短詩型のみを對象とする啓蒙的選集等々がその典型的な例である。これらはいずれも文言の書物ではあるが、かりに擧子業とつながりがあつたとしても、あくまで入門期の要求に應えるレベルのものであるから、むしろ廣範な讀者を想定して編まれたと考える方がより自然である。すなわち、これらの書籍は、文言の新たな讀者層の存在を暗示している。そして、これらの書籍に相前後して、白話文學作品の版本も出現する。そのもつとも著名な例は、中國最早期の白話小説『新刊全相平話』五種（元・至治年間（一三二二—一三二七））であろう。

三、官話の出版言語への昇格

—白話の高雅化—

ところで、官話（白話）の發展史を構想するばあい、三つの段階を想定することができるであろう。第一に、官話がもつぱら口頭語として使用された段階、第二に、書記言語としても使用されるようになった段階、そして第三に、出版言語として用いられるようになった段階である。第一、第二の段階がいつたい何時から始まるのかについては、資料的な制約により、今日ではもはや確定することは難しい（筆者の推測によれば、第一段階の始まりは、秦漢帝國にまで遡ることになる）。第二段階は、敦煌文書の存在によつて、どんなに遅くとも、唐末にはそれが存在したことを窺い知ることができる。では、第三段階は何時頃から始まり、何時頃から本格化したと見なすべきであろうか。

現存資料による限り、宋代の出版言語は、文言文體が壓倒的に主流である。しかし、『新刊全相平話』五種の存在が證明するように、元に入ると官話（白話）文體の版本も急増し始め、元の至元二年（一三三六）には、戲文、雜劇、評話、詞曲の流傳を禁ずる敕令も下されている。また、明初の永樂元年（一四〇三）、ならびに同九年（一四一二）にも、戲曲や小説の出版販賣を禁ずる敕令が下されている。これらの禁令は、14世紀から15世紀にかけて、出版業界に甚大なる變化が生じ、第三段階の本格化が始まったことを、われわれに傳えている。それでは、なにゆえこの時期にそのような變化が生じたのであろうか。

元の後半期に官話（白話）文體の出版物が急増した背景は、おそらく、以下のように合理的に説明することが可能である。まずは、官話（白話）文體そのものの、言語階層における地位が向上したことを指摘で

きる。その端緒を開いたのは、元の後期から三世紀以上遡ることとなるが、おそらく禪の語録であろう。中唐以降、多くの士大夫が禪に接近し、彼らの私生活におけるその重要性は時代が下るにつれ、いよいよ高まった。北宋の、とりわけ中期以降の士大夫にとって、禪の語録は儒教經典に準ずる必讀書とさえなっている。

そういう必讀書の一つ『景德傳燈錄』は、大中祥符四年(一〇一一)に、入藏を赦許され、その後ほどなく刊刻されたほか、その簡約版『傳燈玉英集』も同様に入藏が許され、景祐三年(一〇三六)に刊刻されている。『傳燈錄』は禪宗祖師の傳記集ではあるが、對話が多数引用されているので、讀者は自ずと官話(白話)文體と向き合うことになった。むしろ、純粹な語録も、北宋中期以後、陸續と刊刻されている。祖師の發した肉聲に接することが、禪の眞髓に近づいたための第一歩となるわけであるから、士大夫たちの官話(白話)文體に對する意識にも、自ずと大きな變化が生じたに違いない。このように、「士」の階層に禪が深く關わるようになったことによつて、官話(白話)文體⇨卑俗という價値意識が少なくとも大いに相對化されたであろう。

禪語録に引きつづき、南宋になつて、儒家の語録が一般化したことは、官話(白話)文體に對する見方を根本から變える決定的要因となつたであろう。儒學は、むしろ「士」の傳統文化の中核をなす必須の教養である。廢佛を唱える士がいたとしても、廢儒を唱える士は存在しない。それゆえ、儒學が官話(白話)文體によつて説き明かされるという現象は、禪の語録以上に象徴的な意味を有する、といつてよい。

儒家語録出版の中心に立つていたのが、朱熹(一一三〇〜一二〇〇)とその門弟たちである。朱熹は呂祖謙と『近思錄』を共編し、北宋の周敦頤、程顥、程頤、張載四氏の語録に整理を加え一書としたほか、『程

氏遺書』や『上蔡語錄』等の語録を、みずから出資して、近親者や門弟に託して出版させている。『近思錄』は『傳燈錄』と同じく文言を主とし、官話(白話)の問答が引用される形式を採るが、『程氏遺書』や『上蔡語錄』は純粹な語録であり、官話(白話)文體を主とする。

慶元二年(一一九六)、語録の流傳を禁じ、版木の廢棄を命ずる禁令が下されている(『宋會要輯稿』第一六六冊、「刑法二」)。いわゆる「慶元黨禁」に連なる禁令の一つと見なされるが、朱熹が出版に關つたこれら語録を對象とするものである。このことは、朱熹の企畫刊行による語録が當時、(主として太學生の間で)よく讀まれ流布していたことを裏づけている。朱熹その人の語録も、彼の死後、嘉定八年(一二二五)、嘉熙二年(一二三二)、淳祐九年(一二四九)、咸淳元年(一二六五)の計四回刊刻された後、咸淳六年(一二七〇)、黎靖徳によつて整理が加えられ『朱子語類大全』一四〇巻として刊行されている。このほか、『北溪字義』も儒家語録の一種と見なされる。この書は、朱熹の門人、陳淳(一一五九〜一二二三)が、彼の門弟のために『四書集注』のキーワードについて解説した言葉を、門弟たちが整理したものであり、淳祐年間(一二四一〜一二五二)に刊刻されている^{②)}。

元に入り、朱子學が官學として正式に公認され、全國の教育單位が一齊に四書を中心とする新たな儒學體系によつて教育を始めるようになると、當然のことながら、語録體の白話文も教學の重要な參考資料として用いられるようになった。また、元の統一(一二七九)以前においても、許衡(一二〇九〜八〇)がすでに『大學直解』、『中庸直解』という官話(白話)文體の注解書を記している。成書の具體的時期は不明だが、通説では、至元八年(一二七二)に彼が集賢大學士兼國子祭酒の職に就き國子學を創立して以後の數年間のこととされる。一説

に、モンゴル王族の子弟のために記したものとされるが、いずれにせよ、一國の學者の頂點ともいふべき特別な地位にある者が、官話（白話）文體による注解書を書き、それを教材として用いた事實のもつ象徴的意味は決して小さくない。現にウイグル族の戯曲作家、貫雲石（二二八六—一三二四）が『孝經直解』（『新刊全相成齋孝經直解』）を撰した時、その序文のなかで、許衡が「世俗の語を取り『大學』を直説」したことに觸れ、それに倣つて『孝經直解』を記したと明言している（至大元年（一二〇八）^②）。

このように、12世紀の後半、朱熹が儒家語録を編纂刊行したことを嚆矢として、約一世紀の間に出版された官話（白話）文體による儒學関連の諸書は、結果的に書記言語としての白話（官話）の社會的地位を高めるのに、とりわけ強力な力となつて作用したであろう。かつまた、それを後押しするかのよう歴史が大きく旋回したことを忘れてはならない。百五十年の南北分裂に終止符を打ったのが、元という異民族政權であつたということも、結果的に官話の地位向上に拍車をかけた、といつてよい。

元における「士」の階層は、「モンゴル人↓色目人↓漢人↓南人」という多重構造を持ち、その上層部は文言を必要不可欠とする傳統的文化認識を、原則として共有していない。他方、多民族政權という現實によつて、共通語としての官話の重要性はかつてなく高まり、「文↓白」という不變不動の關係性にも鐵槌が打ち込まれることとなつた。その結果、「士」の階層において、文言の用途は自ずと限られ、その社會的重要性ならびに權威性も相對的に低下した、と想定される。以上のように、官話の社會的地位の向上が、官話（白話）を出版言語に格上げする推進力となつたことを指摘できる。

中國の出版業は、もともと「士」の文教政策と不即不離の關係を保ちつつ發展してきた。そのため、民間の出版業も朝廷による一定の監視下に置かれ、折々に、禁書や版木廢毀の敕令が下されている。北宋から南宋後期に至るまで、文言以外の文體による版本がきわめて少なかったのは、おそらくそのような朝廷の規制とも關わりがあるであろう。しかし、儒家語類の出版は、結果的に官話文體を出版言語にまで格上げした。さらに、元朝という多民族政權の體制が官話の社會的重要性をすり上げたのである。そのため、同じく官話文體である通俗文藝作品の版本化への道が開かれることになつたのではないかと推測される。

加えて、民間の出版業界の臺所事情も要因の一つに數るべきかもしれない。元に入ると、科擧が約四十年間に亘つて停止された。このことは、擧子向けの書籍を安定的収入源としていた書肆にとつては、少なからぬ打撃を與えたであろう。科擧の停止がもたらした經營危機も、書肆たちの目を自然と、新たな讀者層、すなわち市民階層へと向かわせ、彼らの需要や嗜好に應える書籍の企劃刊行を促すことになつた、と言えるのではなからうか。^③

四、南宋末江湖派の位相

前三節において、マクロの視點から、宋末元初の言語状況を俯瞰した。科擧の進展と民間出版業の隆盛を背景として、さらには元という異民族王朝の成立によつて、文言と官話の關係性に新たな變化が生じていたことを確認できたように思う。宋朝約三百年の時間をかけ、文言の通俗化と官話（白話）の高雅化がゆつくりと進行し、宋末元初に出版という營利事業がそれを目に見える形に變え、その道筋をより確

かで廣大なものにしていったことが分かる。以下の三節では、このように文・白二つの文體が交差した時代、宋末元初に再度焦點を當て、ミクロの視點から變化の足跡を追つてゆくこととしたい。すでに官話の高雅化については、そのメカニズムを記したので、以下は——文言各種文體のうち、もつとも早く通俗化した——詩における變化の跡を辿る。

*

元の統一より遡ること約六、七十年、南宋三大家（范成大、楊萬里、陸游）が相ついで世を去つた後、南宋では「永嘉四靈」（徐照、徐璣、翁卷、趙師秀）の詩が流行し、いわゆる「晚唐體」が一世を風靡した。

晚唐體とは、——中唐後期の賈島や姚合の詩風を襲つた——晚唐五代の寒士たちに共通する詩のスタイルを指し、典故の運用には執着せず、五律を中心とする近體の短詩型を多用し、日常卑近な題材を好んで詠ずる、という特徴を有する。また、一字一句の推敲に心血を注ぐ苦吟型の詩人が多いこともその特徴の一つである。

その流行の様子を、元の方面（二二七〜三〇七）が以下のように傳えている。

永嘉水心葉氏忽取四靈晚唐體、五言以姚合爲宗、七言以許渾爲宗、江湖間無人能爲古選體。

永嘉の水心葉氏忽ち四靈の晚唐體を取り、五言は姚合を以て宗と爲し、七言は許渾を以て宗と爲し、江湖の間人の能く古選體を爲すもの無し。（「孫後近詩跋」、『全元文』卷二七）

これは、方が大徳七年（一三〇三）に記した文の一節である。方は、葉適（一一五〇〜一二三三）が「永嘉の四靈」を推賞して以來、「晚唐體」がにわかに流行し始め、その結果、民間では古體の詩をまとも

に書けない者ばかりになった、という。彼はまた別の文においても南宋末期の「晚唐體」流行について觸れ、その流行が嘉定年間（一二〇八〜二四）から始まること、讀書せずに作詩する者が増えたことを指摘している（大徳六年作「恢大山西山小藁序」、『全元文』卷二四）。

士大夫の理想とする詩歌觀が、古今體すべての詩型に通じ、天下國家を擔うという氣概や社會への關心を失わず、高度な學識をバランスよく盛り込むことだとすれば、晚唐體はその對極に位置する詩體といつてもよい。方が批判的口吻でもつて、宋末の晚唐體流行を記述したのもその故である。しかし、晚唐體のこの特徴は、士大夫の詩歌觀を逸脱しているという點において、すでに通俗化の傾向を示している。本稿第二節の末尾において、宋末以降、元にかけて、詩の用語集や啓蒙的選本が數多く刊行されたことに觸れたが、それら詩學の入門書はもつぱら近體の短詩型を對象としたものばかりであったことも想起すべきであろう。これら入門書に宋末の晚唐體作品がすでに含まれていることも、そのことを傍證している。

そして、より重要なことは、この晚唐體流行の背後に、民間の書肆が深く関わっていたという事實である。「臨安府柵北大街睦親坊南陳宅書籍鋪」の主人、陳起（および息子の續芸）は、——永嘉の四靈に墨つきを與え流行の下地を作つた——葉適の編選にかかる『四靈詩選』を刊行したほか、同時代の下層士大夫や布衣詩人、いわゆる江湖詩人の詩選『江湖集』九巻を始め、小集の叢刊形式によって彼らの詩集を陸續と編纂刊行した。現存するものに限つても、その數六十種以上に及ぶ。また、彼は六十種以上の中晚唐詩人の詩集も同じ形式を用いて刊行している。小集の叢刊形式とは、すべてが十巻以下、強半が一、二巻の別集を、同じ版式（左右雙邊、十行十八字の所謂「書棚本」）を用い、

シリーズ物として刊行してゆくスタイルである。このほか、四靈の一人、趙師秀（一一七〇～一二二〇）が賈島と姚合の詩を選んだ『二妙集』や、中晩唐の詩を中心に廣く唐詩を選んだ『衆妙集』も、陳起と趙師秀の親交を踏まえると、陳宅書籍舗によつて刊行された可能性が大きい。

陳起（および續摘）のこれら一連の出版は、晩唐體という共通項によつてすべてが緊密に結びついている。手本とすべき中晩唐の詩人たちの詩集や詞華集を刊行する一方で、彼らを祖述した無名の同時代詩人たちの詩集も編刻し、それらを統一規格によるシリーズ物として刊行した。陳起は單に詩集を刊行し販賣したばかりでなく、吟社を結び、江湖の詩人たちとともに詩を作り出來映えを品評したり、彼らの書籍を買い取つたり貸し與えたり、詩箋紙を贈つたりと、物心兩面の援助をしていゝる。陳宅書籍舗の出版活動期間は、おおよそ嘉定から景定年間（半世紀以上）に亘る。南宋晩期における晩唐體の流行は、民間の書肆、陳起の出版戦略によつて作り出されたものといつても過言ではない。

以上のように、南宋末期の晩唐體流行という現象のなかには、決して見逃すことのできない幾つかの重要な意義が含まれている。まず第一に、民間の書肆が一つの潮流を生み出しそれをリードしたという、從來にない新たな傳統詩歌流行の形態がそれである。第二に、無名の布衣詩人がその中心的な創作主體であつた事實、第三に、流行した詩體が士大夫の保守本流的詩歌觀からは大きく外れたものであつたことである。そして、この三者の何れもが、詩の通俗化という明確な方向性を示している。

五、元朝前期の晩唐體

咸淳十年（一二七四）、宋朝最後の科擧が實施されたその二年後、宋朝は首都臨安を元軍に開け渡し、宋朝は實質的に滅亡したが、元に入つた後も、延祐二年（一二二五）に至るまで、科擧が實施されることはなかつた。その間、實に四十年間にも及ぶ²⁷。知識階層にとつて、出口の見えない閉塞狀況のなかにあつて、南宋の故地では、擧子業盛んなりし頃奮わなかつた詩學が再び興隆した、という²⁸。

周知のとおり、作詩は唐の進士科においては主要な試験科目であつたが、北宋の王安石が詩賦を廢止して以來、科擧に占める重要性が一氣に低下した。南宋に入り、詩賦のコースも復活したが、王安石の改革によつて最重視されるようになった經義や策論の科擧全體における優位性は變わらず、とくに朱子學が公認された南宋末期の理宗（在位期間は、一二二四～六四）以降、その偏重は決定的になつた。そのため、多くの擧子は經義・策論對策を第一に置き、詩賦コースを受験するばあいにも、優劣の出やすい律賦の對策により大きな精力を割くようになった²⁹。しかし、科擧が停止されると、そのような試験對策の束縛から解放され、思いの丈を詩作にぶつける者が急増したのだ、という³⁰。

邯鄲出身の張之翰（一二四三～九六）は宋朝滅亡の數年後（おそらく至元二十年（一二八三）以後の數年間）に江南を訪れ、「其の宗とする所を問はば、晩唐と曰はずんば、必ず四靈と曰ひ、四靈と曰はずんば、必ず江湖と曰ふ」（『王吉甫直溪詩藁』、『全文文』卷三八四）と、江南における晩唐體流行の様子を伝え、それを批判している。前節で引用した方回の文をも含めると、南宋末の流行は、少なくとも江浙の地に在つては、元の前期までは持續していたことを示唆しているが、實のそこ

ろ、元における晩唐體、または詩の通俗化を真正面から採り上げた記事はそう多くはない。言及があつても、方回や張之翰のように、冷やかな口調で採り上げられることがほとんどである。彼ら二人より下の世代では、その傾向が一層顯著になる。しかし、筆者は南宋末期に現れた潮流は、元の統一をもつて雲消霧散したわけではない、と考える。

それをもつとも象徴的に表すのが、至元二十三年（一二八六）十月、宋の遺民、浙江浦江の吳涓が、謝翱、吳思齊、方鳳とともに企劃實行した月泉吟社の活動である。彼らは、范成大がかつて詠じた「春日田園雜興」を題に定め、五言か七言の律詩という形式條件により、約三箇月の時限を設け、懸賞つきで廣く作品を公募した。その結果、寄せられた詩の分量は實に二千七百三十五卷に及んだ、という。應募者は、浦江と同じく婺州に屬する義烏、金華、東陽や、隣の嚴州に屬する分水、建德等の出身が多いが、杭州からの投稿も少なくはない。應募總數は定かではないが、おそらく一萬首を超えたであろう。三箇月という短期間にこれほど多い作品が寄せられたのは、彼らが各地の詩社に直接働きかけ應募を促したことに最大の要因があるであろうが、むしろその前提として、各地の詩社がそれぞれ活發に活動し、詩社相互のネットワークがすでに有効に機能していたからこそである。この點は、詩社という集團が當時、詩人の重要な活動據點となつていたことを示唆している。

吳涓等は、寄せられた二千七百三十五卷のなかから、二百八十名の作品を選び、六十卷の詩集を刊行した（四庫全書『月泉吟社詩集』提要が、現存するのは一巻本のみで、上位六十名、七十五首の佳作を収録するだけである。しかし、その上位入選者の個人情報、簡略ではあるも

のの記されており、それらを一覽すると、縣學の教官職の經歷を有する者が若干名含まれてはいるが、ほぼすべてが布衣の詩人である。かつまた、第一名の連文鳳（投稿時の署名は羅公福）、第十八名の白斑（唐楚友）、第四十四名の仇遠の三名が今日に詩集を傳えるのを除けば、他はまったく文學史に採り上げられることのない無名の詩人たちである。南宋末江湖派の布衣詩人とはほぼ同等の社會階層に屬する詩人群と見なされるが、江湖派が都臨安の書肆・陳起を中心とする廣域のネットワークによつて構成されていたのと比較すると、この吟社の活動は、婺州浦江という小都市を中心とする地方都市中心型のより狭域のネットワークによつて構成されている。この點は作詩集團の據點が地方の小都市にまで擴散したことを端的に示しており、江湖詩人の活躍した南宋末期の狀況よりも、作詩人口の裾野が一層擴がつたことを示唆している。

作品自體は、七律が過半を占めており、五律を主とする晩唐體とは一線を劃するが、典故を用いず、平明な表現を旨とするという點で、一定の親和性は認められる。月泉吟社の選考者の一人、方鳳（二二四〇～二三二）が第四十四名の仇遠（二四七～一三三三）の詩に序文（仇仁父詩序）、『全元文』卷三六一を寄せており、そのなかで彼は、永嘉四靈以後の詩を「詩を以て詩を爲る」と評し、さらに「月露の清浮、烟雲の纖麗」と形容し、明らかに好意的な評價を與えている。この點も月泉吟社と晩唐體との親和性を示しているよう。なお、明の李東陽によれば、月泉吟社のような詩社の活動は、元末明初においても盛んであつた、という（丁福保『歷代詩話續編』所收、『麓堂詩話』）。

次の文は、許有壬（二二八七～一三六四）の「周櫟洲詩序」（『全元文』卷一二八六）の一節である。

詩難乎。鄙人女子率爾成章。詩易乎。千百年文人才子雕心劇胃、白首不能已。率爾成者、後世無以尙、雕心劇胃、而論者千創百孔。詩は難きか。鄙人・女子すら率爾として章を成せり。詩は易きか。千百年の文人・才子心を雕り胃を劇くも、白首なお己む能はざるなり。率爾として成す者は、後世以て尙ぶ無く、心を雕り胃を劇きて、論ずる者は千創百孔す。

おそらく十四世紀前半期の實態を踏まえるが、歴代の「文人」「才子」と對比しつつ、「鄙人」「女子」が「率爾として」詩を作っている當時の状況を断片的に傳えている。

先にも記したとおり、詩の通俗化を真正面から傳える言説は多くはないが、右の一二の事例はそれを強く示唆するものと見なされる。

六、元詩の三つの極

ところで、『全元文』に收められる元人の詩學關連の言説を一つ一つ追つてゆくと、前二節で觸れたような詩の通俗化とは、かなり異質な印象がにわか形づくられる。すなわち、元人の詩論には一體に次のような二つの傾向がはつきりと存在する。すなわち、第一に、方回、張之翰がそうであつたように、宋末の詩を詩學の衰微した形と見なし、その代表としての晚唐體に批判的立場をとること、第二に、おおむね古樂府の醇朴さや盛唐詩の格調を詩の本流と見なし、復古や擬古を提倡すること、の二點である。もちろん、發言者の社會的立場や個人的趣向によつて、細かな主張の相違は見られるが、反晚唐と復古という基調はほぼ一致している。これらの主張と宋末以降の巷間における詩の通俗化との齟齬をどのように捉えるべきであらうか。

筆者はこれを士大夫と非士大夫の詩の二極分化現象と考える。『全

元文』所收の詩論は、おおむね士大夫の立場から發せられた言説である。かつまた、晚唐體流行の地である、江浙、江西、福建出身の詩人たち（趙孟頫、袁桷、戴表元、楊載、范梈、杜本）が、その詩論をリードしている點も示唆的である。彼らに普遍的な反晚唐の復古的姿勢は、おそらく南宋後期の中央詩壇が長期低落傾向にあつたことを踏まえ、そこから脱し、士大夫主導による詩壇の再興を圖ろうとする動きと見なすことができる。つまり、詩學の正統に沿う「正音」「正聲」を聲高に唱え、一統の盛世に相應しい詩の格調を取り戻すことを主張し、中央詩壇の求心力を高めようと企圖したものに相違ない。「官一學一文」の三位一體を理想とする士大夫の詩歌觀から見れば、晚唐體はそもそもその對極に位置する詩體であり、あくまで傍流の一つに過ぎない。よつて、巷間で流行していた晚唐體を明確に否定することで差別化を圖り、士大夫中心の詩論を速やかに再構築しようとしたのだと考えられる。彼らの言説には、非士大夫ないしは民間の詩との峻別意識が前提として強く働いていることを感得できる。

いささか穿つた見方をすれば、彼ら江南知識人の、ある種の焦燥感もしくは危機感の發露といえなくもない。すでに述べたように、元に入ると、舊南宋地域出身者、いわゆる「南人」は權力の最下層に置かれた。士の傳統文化の象徴として君臨しつづけた文言の地位も、異民族政權下で、にわかにその屋臺骨が搖らぎ始めた。それゆえ、傳統の繼承者を強く自覺する彼らは、傳統文化の一角を死守し、さらには自らその中心的地位にありつづけるために、華北の「漢人」詩人とも連攜糾合しつづ、意識的に詩壇をリードし、詩の整風運動を起こした、と解することはできないだろうか。少なくとも、彼らの主張が純粹に文學的見地に立つてのものであつたとするには、當時の彼らを取りま

く環境はあまりに不穩かつ不安定であつたように、筆者の目には映る。いずれにせよ、中央詩壇が求心力を強め、朝野の土の詩歌觀を一つに統合しようとする氣運の高まるなかで、一定不變の詩體など存在せず、立場や狀況に即してそれぞれ實のあることを詠ずるのが詩人の務めである、と主張する人も現れた。黃潛（二二七七—三五七）が、その人である。彼は、片や中央詩壇の領袖（貢奎）、片や一介の布衣詩人（高君驥）という、社會的身分の著しく異なる二人の集にそれぞれ序文を寄せ、同一の持論を展開している。後者（雪蓬集序）、『全元文』卷九七二）を引用する。

予聞昔人論文、有朝廷臺閣、山林草野之分。所處不同、則所施亦異。夫二者、豈有優劣哉。今四方學者、第見尊官顯人摘章續句、婉美豐縟、遂悉意慕效之。故形於言者、類多有其文而無其實。

予聞けり昔人文を論じて、朝廷臺閣、山林草野の分有りと。處る所同じからざれば、則ち施す所も亦た異れり。夫れ二者に、豈に優劣有らんや。今四方の學者、第だ尊官顯人の章を摘ぎ句を續ること婉美豐縟なるを見て、遂に意を悉くして之れを慕效す。故に言に形はるる者、類ね其の文有れども其の實無きもの多し。

黃潛は北宋後期の吳處厚の言葉（『青箱雜記』卷五）を引用し、「文」に「山林草野」と「朝廷臺閣」の相異なる二體のあることを説く。この「文」には、詩も含まれるであろう。そして、「山林草野」と「朝廷臺閣」の間に本來優劣の差など存在しないにも關わらず、「四方の學者」がもっぱら「朝廷臺閣」の體を模倣して、進んで空言を陳ねてばかりいる風潮を批判している。

黃潛は「朝廷臺閣」の地位にまで昇り、比較的順調な官途を歩んだ士大夫である。だがそういう彼も、「山林草野」や、「窮郷の下士、草

野の寒生³²」に、特別な親近感を抱くべき經歷を有していた。彼は義烏の出身で、前述の月泉吟社とも深い關わりがある。吟社が詩の懸賞公募をした時、彼はまだ十歳であつたから、もちろん詩集に彼の名は含まれていないが、起家する前、方鳳に師事しその薰陶を受けており、吟社の活動を身近に體驗し實見していた。よつて、彼が「山林草野」や「窮郷の下士、草野の寒生」と稱したとき、彼の腦裏には、わが師方鳳を始めとする宋の遺民や吟社の同人たちの姿が去來していたに相違ない。つまり、吳處厚の説を借りてはいるけれども、そこには彼自身も身をもつて體驗し熟知していた當時の「窮郷の下士、草野の寒生」の實態が投影されていたのである。

しかし、彼が主張したのも結局のところ、廣義の「士」の階層における二つの極についてであつて、幾らか大雑把な括りをすれば、「中央と地方」、「上士と下士」の異同をいつたものとも見なされる。今かりに「朝廷臺閣」を第一の極、「窮郷の下士、草野の寒生」を第二の極と見なすならば、「窮郷の下士、草野の寒生」の周邊に、彼らとも明らかに異なり、詩の創作を必ずしも社會的な榮達とは結びつけず、あくまで個人の自己表現手段として愛好する、第三の極がすでに存在していたことを忘れてはならない。前述の月泉吟社に投稿した詩人のなかにも、その種の詩人は確實に含まれていたであろうし、許有壬の序文にいわゆる「女子」「鄙人」もここに含まれよう。職種レベルの集團でいうならば、禪僧や道士等、方外の客もここに含まれる。第三の極に屬する詩人たちは總じて、大上段に構えて自説を展開すること、持論を盾に他者を決然と批判し否定することもしなかつた。それゆえ、文學史に採り上げられることも、詩集が後世に傳わることも、ほとんどない。陳起のような慧眼を具えた出版プロモーターが何時の

世にも存在したわけではないからだ。少なくとも元代において、第二の陳起は存在しなかった。

晩唐體は、イデオロギー・フリーの詩體であつたがゆえに、非士大夫の詩人にとつては、もつとも身近でアプローチしやすい詩體であつたであろう。近體の各種格律は、彼らにとつては、質を保證する、佳作への合理的な階梯と映つたであろうし、二韻か四韻かという短さも、創作に附帶する壓迫感を大いに輕減したのである。また、學識を盛り込む必要も、社會の不正を暴き、天下國家を憂う必要もなく、詩的な感性を研ぎ澄まし、新鮮な表現を搾り出せばそれでよしとする、題材及び表現様式上の制約のゆるさも、初學者の創作意欲を前進させる要因となつたに違いない。晩唐體が詩の通俗化、すなわち作詩人口の増大を促した所以である。元に入つた後、第二の陳起は現れなかつたが、晩唐體は等身大の自己を表現するスタイルとして、文言という表現手段を身につけたばかりの新たな階層の表現者にとつて、もつとも身近で基本的な詩作スタイルとなり、市民權を得たといつてよいであろう。

通俗化した文言と高雅化した白話の融合は、宋末元初の段階では、いまだ確かな形をとつて現れ出てはいないが、14世紀、元朝後期以降の出版界における變化は、時すでに準備の最終段階にまで達していることを、われわれに告げている。

注

(1) 初版は、岩波書店、中國詩人選集二集、一九六二年十月。のち、岩波文庫に収録(二〇〇六年二月)。

(2) 張宏生『江湖詩派研究』(中華書局、一九九五年一月)、張瑞君『南宋江湖派研究』(中國文聯出版社、一九九九年五月)、陳書良『南宋江湖派與儒商思潮』(甘肅文化出版社、二〇〇四年七月)、郭鋒『南宋江湖詞派研究』(巴蜀書社、二〇〇四年十月)等。

(3) 拙稿「古今體詩における近世の萌芽―南宋江湖派研究事始―」(宋代詩文研究会江湖派研究班『江湖派研究』第一輯、二〇〇九年二月)。

(4) ベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)『増補 想像の共同體 ナショナルリズムの起源と流行』Ⅲ「國民意識の起源」(白石さや、白石隆譯、NTT出版、一九九七年五月)。

(5) 宋代ではないが、近世後期(明清)における階級の流動化を研究したものに、何炳棣『科擧と近世中國社會 立身出世の階梯』(寺田隆信、千種眞一譯、平凡社、一九九三年二月)がある。その第三章「上昇移動」と第四章「下降移動」の二章において、統計データを踏まえながら、その高い流動性が具體的に明らかにされている。

(6) 村上哲見『科擧の話』第二章「宋代における科擧の規模」(講談社學術文庫、二〇〇〇年四月)、および荒木敏一『宋代科擧制度研究』附篇(同朋舎、一九六九年三月)参照。

(7) 清代の生員に與えられた特權については、宮崎市定『科擧史』(平凡社、東洋文庫、一九八七年六月)第二章第七項「生員」(一一〇頁)参照。擧人の社會的身分についても、同書一五二頁以下に記載がある。

(8) 寺田隆信『明代郷紳の研究』第一章「郷紳の登場」(京都大學學術出版會、東洋史研究叢刊之七十三、二〇〇九年九月)参照。

(9) 前注所掲、寺田隆信『明代郷紳の研究』第一章第一節(二五頁以下)参照。
(10) もちろん、長期的なスパンで概観すれば、文言文體も少しずつ變化を加え、多様性や表現機能を高めていった、というべきであろう。しかし、

清末に至るまで、それが三千年を貫く言語文化の傳統そのものと意識されてきたこともほぼ間違いない。

- (11) 拙稿「東坡烏臺詩案考(下)」(拙著『蘇軾詩研究 宋代士大夫詩人の構造』〔研文出版、二〇一〇年九月〕第六章) 参照。

- (12) 歐陽脩『論雕印文字劄子』(『歐陽修全集』「奏議集」卷十二〔中華書局、二〇〇一年三月〕)のなかで歐陽脩は、至和二年(二〇五五)の當時、都開封にて、民間の書肆が『宋文』二十卷なる、「當今、時政を論議せる言」を多く収録した刊本を賣り出し、それが「學徒を誤まつ」ものであると憂慮している。この『宋文』は、おそらく科擧の論策對策用の參考書として編まれたものであろう。11世紀の後半期、版本が巷間にかなり流布し、當時の學生にも書籍が入手しやすくなっていたことは、蘇軾『李氏山房藏書記』(『蘇軾文集』卷十一〔中華書局、一九八六年三月〕)によつて分かる。

- (13) 注(3) 所掲、拙稿。

- (14) 『大唐三藏取經詩話』も、元代における白話文學刊本の一つと見なされる。この版本は始め王國維によつて南宋の刊と比定されたが、魯迅の疑義を経て、元刊本と見なすのが一般的のようである。また、文學テキストの成立についても、晩唐五代という説が通行してきたが、袁賓『大唐三藏取經詩話』的成書時代與方言基礎』(『中國語文』二〇〇〇年第六期〔總第二七九期〕)では、オリジナルが唐五代にまで遡る可能性は否定しないものの、被字句の検討を通じて、現存刊本のテキストはやはり元代の成立であると結論している。

- (15) 變文や王梵志の詩、曲子詞等の説唱系文學や韻文のほか、公文書の存在にも着目すべきであろう。その一つ、いわゆる「敦煌契」は、民事法制に關わる公文書であるが、官話の痕跡を色濃く残している。池田溫『敦

煌文書の世界』第二部「契」(名著刊行會、歴史學叢書、二〇〇三年一月)によれば、それらは主に9〜10世紀に記されたもの、という。また、敦煌文書には、禪宗の六祖慧能(六三八〜七一三)の語録『壇經』も含まれる。もしも、このテキストが慧能の當時の官話を傳えるものだとすれば、書記言語としての官話の歴史も、初唐にまで遡ることになる。

- (16) 至元二年、永樂元年、同九年の禁令については、李瑞良編『中國出版編年史(增訂版)』(福建人民出版社、二〇〇六年十二月) 上巻四一七、四五二頁、四五七頁参照。

- (17) 以上、『景德傳燈錄』、『傳燈玉英集』の入藏や刊刻については、椎名宏雄『宋元版禪籍の研究』(大東出版社、一九九三年七月) 第二章第三節「敕版大藏經と禪籍」に詳しい。

- (18) 注(16) 所掲『中國出版編年史(增訂版)』 上巻三五七頁参照。

- (19) 王星賢點校『朱子語類』(中華書局、一九八六年三月)「點校說明」参照。

- (20) 熊國禎、高流水點校『北溪字義』(中華書局、一九八三年八月)「點校說明」参照。

- (21) 『全文文』卷六九、許衡紹介文(江蘇古籍出版社、一九九九年九月、第二册四三三頁) 参照。

- (22) 『孝經直解』については、宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大學出版會、二〇〇六年一月) 第一章に詳細な考察がある。

- (23) 前注(4) 所掲の『想像の共同體』では、グーテンベルクによつて活版印刷術が實用化された後、約百五十年の間は、この新技術がほぼラテラ語文獻の印刷のために用いられた、といい、この百五十年は、ヨーロッパの出版業が知識階層の市場を飽和するのに要した時間と見なしている(七七頁)。これと同様のことを宋末元初の出版業界に當てはめて考えることができるかもしれない。すなわち、宋末元初の出版業も知識階

層の市場をすでに飽和し、經營戰略の大きな轉換期にさしかかっていたと見なすこともできる。

- (24) 宋末の晩唐體については、黃奕珍『宋代詩學中的晩唐觀』第六章(文津出版社、一九九七年四月)、趙敏『宋代晩唐體詩研究』第四、五章(巴蜀書社、二〇〇八年九月)等参照。

- (25) 拙稿「宋代士大夫の詩歌觀—蘇黃から江湖派へ—」(拙著『蘇軾詩研究 宋代士大夫詩人の構造』[研文出版、二〇一〇年九月]第一章)参照。

- (26) 注(3)所掲、拙稿の第十節「南宋末期の元の作詩教本、選本、類書の編刻と流行」参照。

- (27) 華北の地では、金の滅亡(一二三四)から勘定すると、さらに四十年が加わり、八十年もの間、科擧が實施されていない(臨時に實施された戊戌選試(一二三八)から勘定しても、七十八年になる)。

- (28) 吉川幸次郎氏は『元明詩概説』(初出は、岩波書店、中國詩人選集二集所收、一九六三年六月。のち、岩波文庫所收、二〇〇六年三月)第二章第四節「市民の詩」のなかで、金の故地、華北では、失職した文化人たちが、戯曲の作家に轉じたことを指摘している。

- (29) 戴表元(一二四四〜一三二〇)の「張仲實詩序」では、南宋の末期を回顧し、詩を輕視して顧みない「搢紳先生」について觸れている。また、「張君信詩序」では、「詞賦」の學習に餘念がなく、詩が輕んじられる様が記されている(ともに『全元文』卷四一七)。

- (30) 奥野新太郎「擧子業における詩—元初の科擧停止と江南における作詩熱の勃興—」(九州大學中國文學會『中國文學論集』第三十九號、二〇一〇年十二月)に關連の考察がある。

- (31) 月泉吟社については、前掲、吉川幸次郎『元明詩概説』第二章第四節「市民の詩」に言及がある。また、歐陽光『宋元詩社研究叢稿』(廣東高

等教育出版社、一九九六年九月)等参照。

- (32) 「窮鄉下士、草野寒生」の語は、黃潛が貢奎の集に寄せた「貢侍郎文集序」(『全元文』卷九四二)に見える。

本稿は、平成24年度日本學術振興會科學研究費、基盤(B)「南宋江湖詩派の總合的研究」による研究成果の一部である。